

[書評]

『ベルリン 1933 一壁を背にして上・下』

岡田浩平先生との思い出とともに

*松木 久子

The Book Review of “MIT DEM RÜCKEN ZUR WAND by Klaus Kordon”
In remembrance of Mr. Kohei Okada

Hisako Matsuki

キーワード: ドイツ, アドルフ・ヒトラー, ナチス党, AEG 社, ユダヤ人, 国会選挙

Key Words: Germany, Adolf Hitler, Nazi Party, Jews, elections

要約: 表題のベルリンというドイツの都市において、1933 年に何が起きたのかということは、現在では世界史上の出来事として誰もが知るところである。民主主義的で合法的な手続きにより、ヒトラー率いるナチス党が政権を取った年である。その後のドイツが歩んだ歴史についても、今や明らかである。民主主義の危機と言われる現代社会において、本書は児童書とは言え、示唆に富む事柄に満ちている。しかし同時に、100 年近く経った今日において、人間は基本的に変わらないのでは、という疑問も湧いてくる。是非とも一読していただきたいと思う、素晴らしい児童書を紹介する。

Abstract: Today, we know that what happened at Berlin, Germany in 1933. Yes, The Nazi Party won a seat in the lawfully democratic parliamentary election and Adolf Hitler came into power finally. We also know that what happened in Germany and the World during World War II. Nowadays many people worry about the crisis of democracy all over the world. There is a brilliant juvenile book here. I'll show you the reason you should read that book.

はじめに

2022 (令和 4) 年 7 月から 8 月にかけて、東京都や神奈川県といった首都圏を中心にして、「ファイナル・アカウント ―第三帝国最後の証言」というタイトルの映画が上映されていた。この映画は、2020 (令和 2) 年にアメリカ・イギリス合作の映画として作成されたドキュメンタリー映画である。ナチス支配下のドイツ・第三帝国に参加したドイツ人高齢者たちの証言を記録したドキュメンタリーであるが、80 代後半から 90 代前半の男女の高齢者たちが、10 代・20 代の若かりし時にどのようにナチスに同調し黨員となったか、そしてやがて軍部の上官となり戦争に加担していき、あるいは、ユダヤ人たちや社会的に不適合とナチス党からレッテルを貼られ排除された人びとを収容していた、強制収容所の係官として活躍するようになったのか、といったシビアな質問に対して、時には顔の表情を歪めたり、撮影をやめてくれと言いながら苦悩に満ち、また時には良き思い出を語るに相応しい笑顔になったりしながら、具体的な説明を加えながら語るという内容となっている。長きにわたって沈黙を続けてきた高齢者たちが語ったことは、ほとんどがナチスへの加担や受容したことを悔いる言葉が主なものであるが、中にはヒトラーの政策を正当化する発言がなされたりもする。しかし共通していたことは、愛国心があったからこそ、よかれと思ってナチスを信奉していたということであった。わが国日本同様に、第二次世界大戦において敗戦国となったドイツにおいても、戦勝国によるニュルンベルク裁判が行われナチスの幹部たちは感情的に一方的に裁かれた、という批判があることは否めないが、いずれにしてもこのドキュメンタリー映画は、賛否両論が示されているということからして非常に複雑な思いにさせられることは間違いないし、物事というものはそれほど簡単に単純化はできないということを改めて痛感させられる。

わが国日本と比較すると、第二次世界大戦に対して徹底的に向き合ってきていると言われるドイツならではのと思うが、今回書評として取り上げた『ベルリン 1933 ―壁を背にして上・下』という著作も、あの当時に何が起きたのかということ、しっかりと着実に次の世代に伝えようという意気込みが感じられる内容である。日本における書物の分類としては児童書として分類されているとは言え、内容は読みごたえのある要素で満たされており、現在の日本とも共通するかと見紛う事柄も記載されている。日本における昭和史研究の第一人者と言われていた半藤一利氏が、2021 (令和 3) 年 1 月 12 日に逝去された。生前半藤氏は、ここ数年間があまりにも 1930 年代の雰囲気、日本社会全体が似てきている、という警告をするかのごとく、同じく昭和史研究の重鎮とも言える保阪正康氏と共に、太平洋戦争に関する著作を共著で出版したり、単著で出版されたりしていた。半藤一利氏や保阪正康氏だけではなく、2021 (令和 3) 年 11 月 9 日に逝去された瀬戸内寂聴さんや、今もご健在でいらっしゃる美輪明宏さんにしても、1930 年代というまさに日本において昭和初期時代の太平洋戦争に向かっていく社会的雰囲気を、実際に知っているお二人もあの時代の雰囲気に似てきているという警告を、2015 (平成 27) 年に長崎県で行われた二人の対談

において指摘をしている。太平洋戦争を直接に体験・経験された人びとが、戦後 75 年以上を経て年々減ってきている今日において、わずかとは言えあの戦争に突入していく雰囲気を実際に知っている人びとからの警告には注意を傾ける必要があるだろう。

しかしながら我われ人間はいつの時代もそうだと思うが、時代の当事者となっているときは、何もかもがよくわからない状態で時が流れていってしまい、意識することはない。そうした時には、おそらくあの時があ時代の転換点だったのだ、ということは後から我われは理解するという代物かもしれない。この 2 年半におよぶコロナ禍において、日本における経済状態はかなり悪化していることは確かであり、また「忖度」という怪しげな言葉が跋扈する状態にあった政府が実行した、これまたトンドEMONAI 経済政策の失敗の結果によって国民が苦しむ状況がすぐそこにまで来ていることを考えると、先の戦争が起きることになったきっかけはやはり経済の悪化であったことを思い起こす必要があるだろう。結局、経済の行き詰まりが戦争に結び付く、ということを折しも 100 年前の状況と重ね合わせて考えてみると、およそ 100 年前にもスペイン風邪と言われたインフルエンザが世界中に蔓延していた状態で、おまけに関東大震災という大規模災害が起きた状況が重なり、その結果、当時の日本経済も徐々に悪化していくという酷似したような状況が展開していたと考えられる。

ドイツのかつての首都であったベルリンにおいて、1933 (昭和 8) 年に起きたことと言えば、世界史を少しでも学んだことがある人であれば、ドイツの歴史を決定的に変えることが起きたことは誰もが今や知っている。つまりヒトラー率いるナチス党が、1933 (昭和 8) 年 1 月 30 日の国会選挙において、合法的に民主主義的な選挙という手段によって第一党となり、ヒトラーが首相となりその後ありとあらゆる法律を成立させ、全体主義的な政治手段によってドイツを支配し、破滅に導いていくことになった始まりの年であった。当時のドイツにおけるこうしたナチス党の台頭という背景には、既成の政党政治が上手に機能せず、労働者というか国民を守るべき立場のドイツ社会民主党やドイツ共産党が、手を携えて協力しようとしめない状況に人びとの間に嫌気が蔓延し出し、そうした中で人びとの不満や不安をうまく取り入れ、選挙を行うたびにナチス党が得票率を伸ばし、合法的に民主主義制度の中から生まれてきたという皮肉がある。

現在の日本の政治状況に目を転じてみれば、1930 年代のドイツの政治状況とよく酷似している。数の論理だけでやりたい放題の与党勢力に対し、明らかに国民の中の不満や不安の声を拾うべき野党勢力はまとまる気配が一向になく、自分たちの党利党略に基づいて政治を行っている状態である。明らかに、国民は呆れてかえっている状態であるが、そのことに野党勢力は気付いていない。「歴史は繰り返す」、という言葉の通りにならないようにするためにもこの著作を一読する価値は大いにあると思う。しかし、年月が経とも基本的に人間の本性は変化しないものなのか、ということはこの著作は我われに痛烈に突き付けてくるように感じるが、微かな希望を見出せる側面も備えている。

1. 主人公ハンス少年を取り巻く暴力の嵐

今となればヒトラーが率いたナチス党は、どう考えてもならず者たちの集団であったとすることができる。総統ヒトラーにしても、どこか誇大妄想狂のような一面があったことや、自分が不遇であることは専ら社会の側に非があるということを若い頃から心に抱いており、自分の野望を実現するためには暴力をも容易に用いるということからも、考え方が非常に偏っていることは今となっては明らかである。私たち日本人は、社会というか集団における同調圧力が殊のほか強く、ここ 20 年あまりにおいては「空気を読む」などという言葉も聞かれることもあり、そうしたことから当時のドイツ人たちがすべてナチス的な考え方に同調していたと考えがちである。日本においてもまたドイツにおいても、いついかなるどんな時代であっても、正常な考え方をする人びとは存在し異議申し立てをする人びともいるのだと思うが、その時代を鋭く批判する声が消されてしまう時代というものがあるのだ、ということを『ベルリン 1933 一壁を背にして上・下』は教えてくれている。明らかにナチス党が発する文言には非がある、何かおかしいと認め思いながらも、いつの間にか靡いていく人びとがある程度いるということを見ると、いつの時代も人間は変わらないということも理解できる。

本書の主人公は、15 歳のハンス・ゲーブハルトという少年である。彼は、「人はなべて平等なり」というフィヒテの言葉を協会のモットーにしていた、1890 年に設立された体操協会であるフィヒテ・スポーツクラブに所属している体操選手である。しかしまさに、このフィヒテ・スポーツクラブが辿ってきた経緯に表れているように、ハンス少年も 15 歳にして社会というか国家に翻ろうされていくことになるのである。フィヒテ・スポーツクラブは第一次世界大戦後、左翼系の体操協会となり、1927 (昭和 2) 年に労働者スポーツ協会に加盟し、1933 (昭和 8) 年の国会議事堂炎上後、ナチス党によって解散させられ、1935 (昭和 10) 年 10 月 18 日、裁判所より活動禁止の判決を受ける、ということになるのである。ハンス少年はまさにナチス党によって解散させられる寸前に、同じフィヒテ・スポーツクラブに所属している親友のノレ・フェルトマンから、1883 (明治 16) 年に創業されたドイツ最大の電機メーカーである AEG での仕事を紹介され、学校を辞め人生で初めての会社に出勤するところから話が始まる。ドイツ史において、明らかに時代の大きな転換点となった 1933 (昭和 8) 年の前年 1932 (昭和 7) 年からの出来事を追いながら、ハンス少年の目そして彼自身の行動を通して、世界史的視点からも大きなモメントとなったドイツにおける民主主義の崩壊から、ファシズムというか全体主義国家果ては独裁国家へと変貌を遂げていく状況が、物語全体を通して語られている。

ドイツという国家が変貌を遂げることになった直接の原因は、第一次世界大戦の大敗によって天文学的数字と言われる賠償金の支払いを要求されたことにより、国内の経済が次第に衰退していき大量の失業者を産み出すことになる一方で、資本家たちや貴族は何の被害も被らないというどうにもならない格差が存在していたことが関係していよう。こうし

た状況の元凶としてナチス党の恰好のプロパガンダとして挙げられたのが、ユダヤ人をはじめとして、税金の無駄な投入がなされているとされた障がい者や低所得者、あるいは社会的な墮落者とされた同性愛者といったナチス党が社会に不要とレッテル貼りをした存在であったと言える。

ハンス少年の家庭においても、第一次世界大戦が大きな影響を与えている。ハンス少年が尊敬している父親ルディも、もともとは腕のよい左官職人であったが、第一次世界大戦に参戦し爆弾の攻撃によって片腕を失ったことから、左官の仕事をするができなくなり、なけなしの賃金しか得ることができない製作所の守衛をしている状況である。このような体験からかはよくわからないが、もともと父親のルディは共産党員であったのであるが頑固な一面もあり、党の方針に納得がいかにずい共産党を脱退したという過去をもっているのであるが、労働者によるデモがあればそれに参加し、労働者が置かれている立場が少しでも現状よりはよい状態になるように、という信念をもち続けている。母親のマリーは夫ルディの意見は常に正しいと考えてはいるが、ドイツ共産党員であり続けている。夫のルディが満足のいく仕事に就けないために、母親が仕事によって稼ぐ賃金によって、ゲープハルト家が住むアパートの家賃や生活費が賄われているが、十分なものとは言えず毎月ぎりぎりの状態で家族が生活しているというのが正直なところである。

ギムナジウムに通っていたハンス少年は学校の成績が良かったのであるが、いくら学校の成績が良くても生活に余裕が生まれるわけではない、ということから学校を続けるよりは少しでも家庭の家計を助けたい、という一心で親友のノアに相談したところ、社会に失業者が溢れる中で唯一空きが生じているポストである、AEGの倉庫係としての職をノアの口利きによって得ることになるのである。いつの時代も似たようなものだと思うが、国家が推し進める政策が適切に機能しない場合、その最悪の場合は戦争であり経済政策といったものになると思われるが、割を被るのは稼ぎ頭の父親または母親や若い世代の子どもとなることのよい例が、この著作の中でも展開されている。ハンス少年の家庭は、経済的には恵まれていない状況であるとは言え、父親と母親はとても仲がよく、兄弟姉妹もみな仲がよいと言うことが救いとも言える。しかしその仲のよい家族の関係の中にも、ナチスの問題が忍び寄ることになり、後にまで続く亀裂が入り家族の絆が戻らないことになろうとは誰も知る由はない。現在の日本においても注意すべきことは、国民の不満や不安を上手に汲み取り、あたかもその政党に投票し政権を担当させればすべてうまく事が運ぶ、というようなことを声高に唱えるような政党の出現は要注意だということである。

ハンス少年には、憧れの存在であり尊敬する兄でゲープハルト家の長男のヘレ（ヘルムート）がいる。すでに結婚して独立し、別な場所にアパートを借りて住んでいるが、共産党員であり青年部の中では重要な働きをしていることから、仕事に就くことができずに無職の状態にある。兄ヘレの妻であるユッタも共産党員であるが、夫ヘレが無職であることから、妊娠中でありながらも家賃や生活費を稼ぐために、ビアホールの掃除婦として安い

賃金の仕事に従事しているが、出産した後にその仕事に再び就くことができるかどうかを心配するという、実に不安定な立場にある。ハンス少年にとって、兄ヘレの妻であるユッタは非常に気の合うもう一人の姉のような存在であり、一緒にいると寛げいろいろな話や相談のできる存在である。ハンス少年の実の姉であるマルタは、非常に上昇志向の強い女性であり、事務所の事務員としての仕事に就き、実はゲーブハルト家の間取りが手狭となったために、屋根裏部屋にマルタとハンスと一緒に寝ているのであるが、その家賃はマルタが支払っているという現実もある。実はこの姉マルタが、仲睦まじく暮らしていたゲーブハルト家を分裂させてしまう張本人となる。このことはおそらく、当時のドイツ中の家庭で起きたことだと想像できることであるが、マルタが付き合っており後に両親をはじめ兄弟たちからの反対を押し切って、婚約そして結婚してしまうことになるギュンター・ブレイムは、ナチスの突撃隊の一員となり暴力的な活動にも徐々に参加することになっていくという存在である。

ギュンター・ブレイムは兄ヘレの元級友でもあり、ギュンター自身はそもそも残虐性など少しももち合わせていない優しい人物であるが、そうした性格の青年であっても、社会における自分自身の地位向上に憧れるあまり、ナチス突撃隊に入隊するという暴挙を犯してしまうのである。ある意味、時代の雰囲気そうさせた、と言えそうであるかもしれないが、歴史的な結果を知り得ている現代に生きる我われからすると、ギュンターがとった行動は軽率だと言わざるを得ない。しかし、そうした道にしか可能性を見出せない、というある種追い詰められた状況で過酷な現実を前にしたときに、果たして自分自身はギュンターとは異なる道を選ぶ自信はあるだろうか、という不安を想起させる。ハンス少年には、もう一人中学生の弟であるムルケル（ハインツ）がいる。ムルケルはゲーブハルト家の末っ子として、父親や母親そして兄であるハンス少年に甘える弟でありながらも、家族のバランスをよい感じでとっている存在である。末っ子のムルケルにとってハンス少年はギムナジウムで優秀な成績を修め、体操選手としても活躍している誇りに思える兄であり自分の勉強特に数学の勉強の面倒を見てくれる、いつでも頼りにできる存在である。同じ兄弟姉妹といっても、ムルケルにとってハンス少年は比較的年齢も近いこともあり、親しい友だちのような存在でもある。

ハンス少年はギムナジウムでいくら成績がよくても、家庭が貧しい労働者階級であることから、本当は大学に進学したいという思いがあっても実現するのはまず不可能であり、将来は父親のような職人になりたいという夢をもってはいるが、母親の決して充分とは言えない稼ぎの足しになるようにと、かつて自分の父親も勤めていたAEGというドイツを代表する大会社に、たった一つ空いたポストにたまたま就職できるというだけで、幸運と言わざるを得ない環境にあったということである。ゲーブハルト家が共産党を信奉し、党员であるということはある程度知られていたことであることから、ハンス少年も共産党を礼賛しているものと他の人びとも見なしていた。しかしハンス少年は、非常に慎重なとこ

ろがあり、自分の政治的立場をはっきりさせることにはまだ至っていない。ハンス少年を取り巻く人びとからすれば、彼の家族の状況から判断しハンス少年も共産党を礼賛しているものと思っているのである。そのような誤解からハンス少年は、大会社への緊張みなぎる出勤の初日から、あの当時のドイツという国家を象徴するような暴力の嵐の洗礼を受けることになるのである。AEGの倉庫係として勤務することになったハンス少年は、油や埃にまみれた職場での汚れを落とすためのシャワールームにおいて、新入社員に対するある種の洗礼とも言える嫌がらせに遭遇する。こうした嫌がらせの背景には、共産党員へのナチス党員からの嫌悪というものがあるが、徐々に党員を増やしつつあったナチス党員のこれ見よがしの存在誇示ということも関係していた。男性同士の争いということもあり、シャワールームにおいて壮絶な暴力の横行になるのであるが、ハンス少年の味方という存在もあり、暴力から逃れることもできる一方で、窮地に陥る状況に遭遇してしまうことも起きる。先にも述べたように、ハンス少年自身は自分の政治的立場を決め兼ねている状況であるとは言え、ナチス党員たちにしてみればそのようなことは一切関係のないことであり、ある種ハンス少年はナチ党員の恰好の餌食となり得ていたのである。

ハンス少年は、父親ルディがかつては熱心な党員であり支部のリーダーも務めていたにもかかわらず、労働者のための政党であるはずのドイツ共産党が、いつの間にか中央集権的な党指導部とモスクワの命令を無批判に受け入れる風潮に納得がいかず、共産党が奴隷制と官僚主義に染まり、偽りに満ち非人間的になったという理由から脱党した、という理由には一理あると思っていた。ハンス少年を取り巻く周りの多くの人びとも、なぜハンス少年が共産主義青年同盟に加入しないのかという疑問を、事あるごとに彼に訊ねるという状態でもある。この著作の読者はおそらく、ハンス少年の物事を慎重に深く考えようとする態度に好感がもてると同時に、用心深くことを運ぼうとする姿勢や当時のドイツが陥っていた時代の過ちに鋭く気付いている聡明さに、児童文学ならではの将来への希望を垣間見る思いがすることであろう。いつの時代にも、その時代特有の問題点に気付いている人びとが存在しているのであり、時にはその問題点を声高に叫び、少しでもよい方向を模索していこうとする人びとがいるからこそ、絶望的な状況を迎えてもやがて正常な方向性が打ち出されてくるのだと言える。この児童書におけるハンス少年という存在は、まさに新しい時代へのささやかな希望という象徴と言えるが、しかし現実は実に過酷である。

第一次・第二次・第三次安倍晋三政権において、約10年間もの間財務大臣を務めていた麻生太郎氏は、憲法改正がなかなか捗らない状態についての見解において、「ナチスの方法に倣ったらどうか!？」という問題のある発言をしたことで物議をかもした。100年近く経った今日においても、ナチス的なものの台頭という問題にはある種の誘惑が潜んでいるように、今後も永遠に考え続けていかなければならない事柄だと捉えることができよう。多くの人びとが何となく胡散臭い、怪しいと思いながらも靡いてしまう、という人間心理というものは、いつの時代にも共通性があることを絶えず思い起こす必要があるだろう。

本書の主人公ハンスは、まさに時代の流れに同調することに疑問を絶えず抱いており、周りの人びとが自然にナチス的な考え方に同調し始めていることに対しても、大いに疑問を抱いている少年である。確かに、尊敬する両親や兄が共産黨員ということもあり、ハンス自身も周りの人びとから当然、共産黨員であると思われるしており、また共産党的な考え方を信奉しているものと思われる節があるが、ハンス少年は絶えずそうした見方に対して、ささやかな抵抗をし続けているのである。

2. ささやかな抵抗をし続けることが次の時代へと繋がる重要な要素

ドイツ人作家クラウス・コルドン(Klaus Kordon, 1943-)氏によって著され、酒寄進一氏によって訳され、岩波書店から岩波少年文庫『ベルリン 1933 一壁を背にして上・下』として出版された著作は、20世紀前半の〈転換期〉を描いた三部作の二巻目にあたる。つまり1933(昭和8)年1月30日にヒトラーが首相に就任し、ファシズム国家に邁進していく状況がドイツに突然現れたわけではない。第一巻『ベルリン 1919 一赤い水兵』は、1918(大正7)年から1919(大正8)年にかけて起きた出来事である、スパルタクス団ないしはドイツ共産党の理想の実現を目指した、ドイツ再出発の夢と希望に満ちた内容となっている。そして第三巻『ベルリン 1945 一はじめての春』は、ナチス党のファシズム体制により繰り広げられた第二次世界大戦の大敗と、その後の混乱について語られている。第一・第二・第三巻とも、ベルリン在住の労働者階級のゲープハルト家を通して、それぞれの時代が描かれている。第一巻の主人公は長男ヘレの目を通して、第二巻では先述したようにヘレの弟である次男のハンスが主人公として、第三巻ではヘレとその妻ユッタの娘エンネが12歳の時の目を通して物語が展開されている。

クラウス・コルドン氏による三部作は、いずれもそれぞれ岩波少年文庫として上・下巻本として出版されている。ちなみに第一巻は2020(令和2)年2月に、第二巻は同年4月に、第三巻は同年6月に刊行され児童文学としての扱いとなっている。よく日本とドイツは、第二次世界大戦への向き合い方が比較されるように、日本においては昨今いまだに、「歴史認識」なる言葉が跋扈し第二次世界大戦に対する名称(太平洋戦争や大東亜戦争、日中戦争や先の大戦など)や評価も定まっておらず、後世にどのように伝えるべきかという明確な基準も示されていない状況にある。一方ドイツは、ヨーロッパ大陸というお互いの国境を接している国々においては、歴史学者たちが半年や一年に一度、というように定期的に歴史的な事柄を話し合う機会がもたれていることから、歴史的事実についての共通認識をもち得ている。このようなことから考えると、児童文学としてこれからの国や社会を担う世代に歴史的事実を踏まえた物語が提供されている状況に、日本人としてはとても羨ましく感じ、また我われ日本人もこのようにありたいと思う。歴史的事実に向き合うということには時折、痛みが伴うものだと思うが、次世代の若者たちに過去の出来事をしっかりと伝え、二度と同じようなことが起きないようにすることが先を生きる大人の責任だ

と思うのであるが、適切に機能しているとは言えない状況がある。

『ベルリン 1933』の帯紙には、作家のひこ・田中氏の「大人には痛いし、読むには覚悟がいるが、その価値はある。」という言葉が記載されている。児童文学とは言え、当時のドイツというか世界中に渦巻く暴力礼賛のような世情において、特にナチス党に所属する人びとからの日常的な暴力に曝されるハンス少年の物語を読むのは、確かに苦痛を伴う。しかしその反面、15歳という思春期ならではの甘酸っぱい出来事も、要所要所に織り込まれていることが救いでもあり、さらに児童文学ならではのと言えらると思うが、将来を見据えた希望も織り込まれていることも確かである。ハンス少年は不安を抱きながら、日常的に暴力に支配されているドイツを代表する大会社 A E G 社に勤めながら、同じ会社に勤めているミーツェという年上の女性の存在を知るようになる。お互いがお互いの存在を意識し合うという状況から、また会社にはハンスやミーツェくらいの若い存在が珍しいこともあり、女性たちの職場において二人は恰好のおはやしの存在ともなるのであるが、徐々に親しくなりやがて恋人同士に発展していくが、実はミーツェはナチスが最も嫌うユダヤ人にルーツをもっているのである。ハンス少年の家族それぞれも、ユダヤ人に対して差別意識などは何もなく、むしろ息子に出来た初めての彼女ということから大歓迎する。またハンスとミーツェの関係から考えても、当時のナチス党による最大のプロパガンダであったユダヤ人差別ということが、いかに滑稽なものであるかということも、ハンス少年とミーツェの関係から非常によく理解できる。

ミーツェは、ユダヤ人のカールおじさんとベルタおばさんと共に、まるで息をひそめるかのように一緒に住んでいる。ハンス少年が居住している地域からは少し距離のあるミーツェの家であるが、その距離が二人にとっては苦痛とはならず、まるでデートを楽しむかのようにいろいろな話をしながら、ハンス少年がミーツェを時折送っていくのである。ハンス少年は、ミーツェのおじさんやおばさんとも親しくなっていくのであるが、次第にユダヤ人への嫌がらせが横行していく状況もよく記載されている。社会が平穏で無事な時には、ある特定の人種や民族への嫌悪というものは、トンデモナイことであることを我われ人間はよく理解しているものだと思うが、社会的に不満や不安が渦巻き始めストレスが溜まり始めると、弱者や嫌悪感を抱く人びとへのヘイトめいたものが現れてくる。また、そうしたことを声高に叫ぶ扇動者に、いつの間にか同調していく傾向がどうも我われ人間にはあると言わざるを得ない。時が経ち冷静に考えれば理不尽なことも、理不尽なこととして考えられなくなる時代というか、社会的雰囲気あるいは空気感というものが生じるときがあるが、そうしたときにどのような態度を自分では取り得るのか、といった問題が問われていると言えよう。嵐のようにことが過ぎれば「私は騙されていたのだ!？」、と声高にいう人は枚挙に暇がないが、騙されることへの責任はどうなのか、と問わずにはいられない。昨今の日本の社会に渦巻く空気感といったものを考えても、共通性は大きいと言える。時代を鋭く見つめる目というものを考える上でも、『ベルリン 1933』は必読書に値

し得ると言える。

ハンス少年自身は、政治的立場を決めかねているとは言え、兄ヘレの共産党員仲間の少年たちや他の党員たちとともに、反ナチスの集会やデモ行進に参加することはもちろん、駅周辺やベルリンの街の至る所にポスターを貼る手伝いをするなど、自分たちが置かれた立場でできる限りの抵抗を試みる。ナチス党に所属している誰かに、そうした様子が見つかることになれば、銃で撃たれ死に至るかもしれない、という熾烈な闘いを試みているのである。社会の雰囲気が変わってしまうと、今まで味方だと思っていた人びとが簡単に敵方に寝返りを打ち密告されてしまう可能性が出てくるなど、またその反対の場合も容易に他人を信じるのが出来なくなっていく様子も非常によく描かれている。所詮、人間とはこういう者かという絶望的な思いをする一方で、意外なところに味方ならぬ助っ人めいた人びとがいる様子を知ると、人間社会もそれほど捨てたものではない、といった思いも浮かび上がってくる。時の政権担当者がならず者となったときには、これほどまでに人びとの精神は荒廃し、やがて社会もそして国家も腐敗していくという様子が、手に取るように理解できる作品でもある。それゆえに、有権者であることの意義は非常に大きい、という教訓も導き出せるのであるが、時として人心は言葉巧みな為政者に簡単に絡めとられる、という悪しき習慣ももち合わせていることも想起させられる。

1933 (昭和8) 年1月30日の国会選挙において、決して起きてはならぬヒトラーが首相となるということが起きてしまった。選挙結果を聞いた良識ある人びとは、絶望の淵に追いやられ不安感が増していくこととなった。ナチスを支持する人びとは、街中に出て狂喜乱舞することになるのであるが、今や恋人同士となったハンス少年とミーツェの二人は、兄ヘレが住むアパートの屋上から、密かに共産党の旗を垂らすという暴挙をやっているのである。このような暴挙に出ることは、実は命がけのことであったのである。共産党員を一網打尽にしようとして計画していたナチス党の面々は、少し前から兄ヘレのアパートの部屋を監視しており、何かあればすぐに襲撃しようという体制をとっていたからである。そうしたことにもめげずに、ハンス少年とミーツェはちょっとした隙をついて堂々と翻る共産党の旗を誰からも見える位置に吊るすことに成功するのである。それはまるで、民主主義的な選挙という合法的な手段で政権を獲得したところで、私たちはナチス党が支配し、ヒトラーによる独裁政権などには決して屈することはない、というメッセージそのものを風に翻る旗は象徴していたからである。そしてまた、その光景を見た人びとも密かに、ナチスに対してまたはヒトラー政権に対して、抵抗していくことを新たに決意していくことになったからである。

しかしながらその後、約12年にもおよぶヒトラー政権下において行われたことの数々の悪行を考えると、改めて民主主義の意味や選挙という問題そして人間心理といったことを深く学ぶ必要性があることに気付く。「歴史は繰り返す」という言葉があるが、ここ数年の日本をはじめとする世界中の各国における民主主義の劣化や、選挙制度の破綻といった

問題を考えると、誰も真剣に過去から学ぼうとしていないように思われる。確かに我われ人間は多少、成長や進歩そして発展はしているように思うが、それほどでもないかもしれないとも思うこともある。戦争に突入していった 1930 年代に似てきている時代状況であるからこそ、この著作は現代に生きる我われに多くの問題点を容易に気付かせてくれる。手遅れとならないうちに、是非とも手に取って一読してほしいと思わせる内容に満ちた児童書である。作家のひこ・田中氏の「子ども（未来）に信頼を抱くのが児童書の強さだ。」という帯紙の言葉の通りであるし、未来を展望できる社会の実現あるのみである。

おわりに

2 年前の 2020（令和 2）年や 2015（平成 27）年といった 1945（昭和 20）年の第二次世界大戦終結から数えて、75 年や 70 年という節目の年には必ず、戦争についてのテレビ番組や書籍などの特集が組まれる。そうでなくともこの頃は、あの戦争を体験した人びとが年々減少していくことから、毎年のように殊に日本においては、8 月は戦争月間と言えるほど何かしら特集が放送されている。おそらく平成生まれの人びとにとっては、またか！と思うことが多々あるであろう。映画においてもやはり毎年のように、必ず 1・2 本またはそれ以上にナチスに関連した内容をもつ映画が公開されている。よく言われるように、世の中から戦争の惨たらしさを実際に経験したり体験したりして、知っている人がいなくなると次の戦争が準備される、と言われるように、昨今のコロナ禍によってさらに拍車をかけられたような殺伐とした社会状況はそうしたことを示唆しているのかもしれない。やはり知らないよりは知っているに限るわけであるから、これからも意識してそうしたものに触れていかざるを得ない時代が到来したと思う次第である。

本書は、ドイツ史において最大の汚点とも言えるナチス党の台頭といった時代を、児童文学という分野で取り上げ著された作品である。自国の歴史のマイナス面を的確に捉え、後世の人びとにしっかりと語り継ごうという意味からも、我われ日本人が学ぶべき点、大いに含まれている内容であると思われる。この 30 年あまりの間に、自虐史観という言葉で表されるように、旧日本軍が行った事柄に真摯に向き合うどころか、否定的にとらえることに異議申し立てをすること自体は再考する必要があるとは言え、どこか感情的に声高に叫んでいる状況が垣間見られることは悲しい限りである。やはり後世の人びとに、歴史的な事実に向き合うことの大切さや、2 度と同じことを繰り返さないためにも、何が起きたのかということを確認しながら語り継いでいることの重要さが、本書を通じてよく理解できる。しかしながら毎回の選挙の度に、もう少し何とかならないのか、という思いが渦巻く昨今ではあるが、時代の潮流をよく読みながら、少しでもより良い社会の到来を実現するためにも、意思表示の手段である選挙について真剣に向き合いたいと思う時代の到来でもあるように思う。

献辞：特に、ナチスに関連する内容をもったものに筆者自身が興味を惹かれるようになったのは、小学校高学年において歴史を学び始めた時に教科書の写真資料の中に、「労働すれば自由になれる (Arbeit Macht Frei)」という文言がとても気になったことである。その後、高校生や大学生の時から現在に至るまで、毎年欠かさずにナチスに関連した映画を見るようになっていく。早稲田大学の大学院生時代に確か単位取得のための対策として、学部の女子大時代に第二外国語がドイツ語であったため、岡田浩平先生が担当されている「ドイツ語講読」の授業を取ったところ、ナチス関連の事柄をそれなりに筆者自身を知っているということに岡田浩平先生が興味をもってくださり、その後毎年のように授業に参加するようになったことから、親しく関わりをもつようになったという経緯がある。岡田浩平先生が授業で扱われ使用された教材は、ドイツから直輸入される新聞記事が主なものであった。それも、ナチスに関連する新しい発見めいた内容であり、授業に間に合わせてせっせと毎回辞書を引いて文章を訳していったことが思い出される。岡田浩平先生の授業を通して感じたことは、ドイツ人というものは年月が経つてもしつこく歴史的事実に向き合う人たちなのだ、ということである。いくら年月が経過したとしても、過去の出来事は過ぎ去ってしまったことではなく、新たな資料や目で何度でも見直す必要のあることだ、という考え方をしていることには感心させられる。

昨今、日本において政治家や官僚が関わった事柄において、文書改竄や破棄ということが平気でまかり通っているという状況があるが、おそらくドイツ人をはじめとして他の欧米人からしてみれば、信じられないことが起きているという感覚であろう。歴史からの審判を仰ぎ見ない状況は、下手をすれば日本という国家は信用できない国である、と思われるかもしれない。いずれにしても、歴史というものに向かい合う姿勢が、こうも異なるものなのか、と思うのである。ある時、大学院から放出されて何年も経った時に公開された映画の内容が、まさに岡田浩平先生の授業で扱われた新聞記事の内容であったことから、その旨を岡田浩平先生に手紙で伝えたところ、自分の授業内容を覚えてくれていたことが嬉しい、ととても喜んでくださったことがあった。それ以来折に触れて、いろいろなことを相談したりしながら連絡を取っていたのであるが、残念ながら今年〔2022（令和4）年の3月30日に逝去されたという報告を奥様からこの8月に知らされた。最後に電話で岡田浩平先生と話したのは、昨年2021（令和3）年の12月30日のことであったが、事前に『ベルリン1933』という児童書についてお知らせしたこともあり、その児童書についての話になったが、「遂に僕も教え子から、文献を紹介してもらうようになったんだなあ〜」と感慨深げに仰っていただけた。「必ず購入して、読んでみるよ。」とも仰っていたが、今となってはその後の岡田浩平先生のご様子を知る由もない。

ナチスに関連する内容に触れるたびに、今までもまたこれからもお世話になった岡田浩平先生のことを思い出すことになろう。厳格に定義すれば、第二次世界大戦で敗戦国となった日本とドイツでは、ファシズムというか全体主義国家という内容は異なるであろう。

しかし同じような時期に、同じような方向性をもって国家が傾いていったことの共通性はあろう。絶えずナチスのことに関心を抱いていらっしやった岡田浩平先生の研究姿勢を思い出しながら、これからも国家が少しでもおかしい方向へ傾かないようにするにはどうすればよいか、ということを考え続け、確信めいたものを得ることが難しい問題であることは確かであるが、思考停止に陥ることの無いように関心をもち続けたいと思う。それはいみじくも、ユダヤ人でありハンス少年の恋人であるミーツェが語っている言葉、「信じるものを乗り換えるのはむずかしいことじゃないわ。自分の頭で考えることのほうがずっとむずかしいことよ」、とまさ言っている通りであろう。我われ人間は、絶えず他人が言うことに左右される傾向があると思うが、しっかりと他人の意見を聞いて吟味しながらも、自分の頭で考えていくことがいかに重要かということである。

興味の尽きないナチスという永遠のテーマをお教えたくださった岡田浩平先生の思い出とともに、この書評を終えたいと思うのであるが実は、今となってはこれも岡田浩平先生からの遺言めいたものであるかもしれないことにも触れておきたい。それは、12月という師走ではないが、岡田浩平先生が近くの郵便局に走って行って投函して送ってくださった文章の中に、岡田浩平先生が早稲田大学の学部生時代に体験された「日米安保反対闘争」のデモに参加された時の模様が綴られた内容のものが入っていた。つまり、国家がおかしい方向に傾き始めようとした場合には、時にはしっかりと国民の一員として意志表示をするべきだ、ということだと思う。岡田浩平先生は確か生前、「正論はひるまずに言わなければいけないよ！」と常に仰っていた。亡命ユダヤ人文学者、特にヴァルター・ベニヤミンの研究をされていた岡田浩平先生について知り得ていることは、ほんの少しではあるが、それでも一人の人間としてどのように生きることが良いのか、というお手本めいたものを事あるごとに示していただいたと思う。岡田浩平先生のご冥福をお祈りしながら、少しでも生前の岡田浩平先生がお考えになっていたことに近づけるように、自分の頭でしっかりと考え、言わなければならないときはしっかりとと言えるように、日々精進して参りたいと思いつつこの書評を終えたいと思う。それにしても改めて、コロナ禍が終息した暁には岡田浩平先生にお会いして話がしたいと思っていたが、その存在自体がこの世からなくなってしまった今、本当に残念至極である。岡田浩平先生という素晴らしい先生にお会いできたことだけでも、大学院という怪しげなところで学んだ価値があったことは確かであり意味あることであつたと思う次第である。

*松木 久子 秋草学園短期大学 幼児教育学科 准教授